師範科	本科小計	選科小計	特別学生小計
	三七	一一	油一
(一九)	二六	六	(四)
(二〇)	二二	二	(一三)
(一〇)	一〇	二	六
	二二	一	六五
	五〇	一一	六五
	三九	一	六五
	(242)		(18)
	五五		六五

() は現員中の兵役等による休学者数を示す。

④ 就職状況

昭和十八年度卒業者の翌十九年度における就職状況を「自昭
和十
八年文部省往復書類教務掛」による。

建築科	科				彫刻科		油画科	日本画科	科種別
	漆工部	鍍金部	鍛金部	彫金部	木彫部	塑造部			
八	七	六	四	五	一三	七	二九	一七	卒業者数
二	五	五	四	五	七	四	一七	一〇	軍隊
	一				四	二	三	二	教員
六	一	一			二	一			銀行社
									自営
							九	五	就職しない者

師範科	一一	二	一〇		
-----	----	---	----	--	--

⑤ 繰上げ卒業式

昭和十九年九月二十二日、前年度と同様に修業年限六カ月短縮による卒業証書授与式(第五十四回)が行われた。新卒業生の七十五%は応召休学中で、卒業制作陳列会は提出作が少数であったため中止された。左記は「昭和十九年度卒業式に関する書類」の抜粋である。

第五十四回卒業証書授与式次第

昭和十九年九月二十二日午前十時

- 一、新卒業生式場着席(第一號鐘、講堂北口ヨリ出入)
- 二、生徒着席(同 上)
- 三、職員、舊卒業生着席(第二號鐘、講堂東口ヨリ出入)
- 四、來賓着席(同 上)
- 五、宮城遙拜、靖國神社遙拜、出征將士ノ武運長久祈願
- 六、國歌二唱
- 七、卒業證書授與(代表受領。彫金、鍛金、漆工ノ卒業生ハ全部入隊ニ付鑄金代表力受ク)
- 八、學校長式辭(式辭前後ニ卒業生敬禮)
- 九、文部大臣祝辭(祝辭前後ニ卒業生敬禮)
- 十、卒業生總代答辭
- 十一、校歌
- 十二、式終了挨拶
- 十三、來賓、職員、舊卒業生、新卒業生、生徒順次退場

昭和十九年九月卒業生科別人員表

日本画科	一八名	内 入 营	一六名
油 画 科	二七名	〃	二〇名
彫刻科塑造部	一二名	〃	一〇名
同 木彫部	一〇名	〃	六名
工芸科図案部	一八名	〃	一三名
同 彫金部	五名	全部入营	
同 鍛金部	三名	全部入营	
同 鋳金部	五名	内 入 营	三名
同 漆工部	六名	全部入营	
建 築 科	六名	内 入 营	四名
師 範 科	六名		
計	一一六名		(八六名)

川上恒一	藤沢友一	置塩恵	大 林 春 雄	沼 野 寛	本 間 勇 夫	芳 賀 準 録	油 画 科	杉 原 信 彦	信 ^レ 太 ^ニ 金 昌	加倉井和夫	武 田 照 淳	竹 山 博 二	繩 野 秀 正	中 村 光 哉	桑 原 喜 八 郎	桑 原 清 明	渡 辺 定 夫	小 栗 潮	大 山 忠 作	大 竹 武 雄	戸 川 喜 久 良	馬 場 孟 臣	井 崎 昭 治	加倉井和夫	信 ^レ 太 ^ニ 金 昌																								
金 興 洙	李 達 周	関 山 敏 治	宇 佐 美 正 弘	吉 武 正 幸	吉 岡 侃 一	脇 山 雍	大 瀬 洵 次 郎	德 尾 政 信	木 戸 勝 龟	伊 藤 茂 之	赤 松 正 義	小 倉 康 男	小 倉 勉	内 田 豊 治	永 野 敏 男	土 屋 新	田 中 愛 行 ^{タカシ}	影 山 佐 七	岡 部 冬 彦	大 橋 桃 之 輔	浜 田 熙 ^{ヒロシ}	伊 藤 精 二	伊 藤 守 正	林 和 宏	星 野 正 一	玉 那 覇 正 吉	村 重 勝 久	松 下 重 治	小 島 克 也	安 藤 士 ^{タカシ}	佐 藤 登	沢 野 基 良	坂 野 青 嵐	城 下 久 実	森 堯 ^{タカシ} 茂 ^{タカシ}	阿 部 寛 寿	阿 部 平 臣	赤 松 克 巳	秋 元 清 弘	阿 武 清 勝	坂 本 寛	木 村 鉄 雄	木 村 鉄 雄	宮 沢 義 郎	秀 島 誠 吾	関 山 敏 治	李 達 周	金 興 洙	
沖 進	高 井 寛 二	塚 原 栄 一	野 田 健 郎	黒 木 進	草 野 睿 三	八 幡 健 二	山 田 尚 政	松 本 富 二	深 見 公 道	福 間 文 明	小 畑 亮	阿 部 寛 寿	阿 部 平 臣	赤 松 克 巳	秋 元 清 弘	阿 武 清 勝	坂 本 寛	木 村 鉄 雄	木 村 鉄 雄	宮 沢 義 郎	秀 島 誠 吾	関 山 敏 治	李 達 周	金 興 洙	沖 進	高 井 寛 二	塚 原 栄 一	野 田 健 郎	黒 木 進	草 野 睿 三	八 幡 健 二	山 田 尚 政	松 本 富 二	深 見 公 道	福 間 文 明	小 畑 亮	阿 部 寛 寿	阿 部 平 臣	赤 松 克 巳	秋 元 清 弘	阿 武 清 勝	坂 本 寛	木 村 鉄 雄	木 村 鉄 雄	宮 沢 義 郎	秀 島 誠 吾	関 山 敏 治	李 達 周	金 興 洙
工芸科図案部	伊 藤 守 正	伊 藤 精 二	大 橋 桃 之 輔	岡 部 冬 彦	影 山 佐 七	田 中 愛 行 ^{タカシ}	土 屋 新	永 野 敏 男	内 田 豊 治	小 倉 勉	小 倉 康 男	赤 松 正 義	安 谷 屋 ^{アヤヤ} 正 義	佐 原 雄 次 郎	三 好 二 郎	宮 内 義 也	平 野 義 則	工 芸 科 彫 金 部	飯 田 美 郎	仁 藤 義 七	岡 村 真 弓	高 橋 武	工 芸 科 彫 金 部	伊 藤 守 正	伊 藤 精 二	大 橋 桃 之 輔	岡 部 冬 彦	影 山 佐 七	田 中 愛 行 ^{タカシ}	土 屋 新	永 野 敏 男	内 田 豊 治	小 倉 勉	小 倉 康 男	赤 松 正 義	安 谷 屋 ^{アヤヤ} 正 義	佐 原 雄 次 郎	三 好 二 郎	宮 内 義 也	平 野 義 則	工 芸 科 彫 金 部	飯 田 美 郎	仁 藤 義 七	岡 村 真 弓	高 橋 武				

藤田喬平 工芸科漆工部 高村英也

工芸科鍛金部 五十嵐貫一 木下日出男

香取臣世 生駒武彦 清水紀元

谷口欣也 津田祐作 師範科

土屋欣一 児島徹郎 花田忠吾

工芸科鍍金部 佐藤進 河村貢

西村純一 神子高敏雄 上島一司

高橋宏弼 建築科 武林敬吉

根箭忠司 吉中道夫 矢口洋

福井良之助 吉永宏 海老沢敏夫

榎村成徳 高橋稔

昭和十九年九月
第五十四回卒業生卒業製作目録(席次いろは順)

日本画科

山 馬場 孟臣 長崎

苔 同

落日 大竹 武雄 群馬

岩 信太 金昌 秋田

油画科

画室 本間 勇夫 新潟

無題 沖 進 北海道

窓 松本 富二 香川

黎明 阿部 寛壽 北海道

婦人像 阿部 平臣 福岡

フィンシハーヘン 阿武 勝山 山口

少女 坂本 寛樺 太

彫刻科

女立像 玉那覇正吉 沖繩

首 佐藤 登山 形

首 小島 克也 新潟

木彫部

牛 伊藤 茂之 東京

男立像 吉武 正幸 東京

女 ロダンの胸像 宇佐美正弘 福島

関口 孝吉 東京

工芸科

図案部

自動車を基幹とせる移動展 浜田 熙 大阪

決戦の秋に於ける言葉と描画表示 影山 佐七 埼玉

宣伝への道程(グラフィックに付て) 田中 愛行 群馬

宣伝としてのポスター及びパンフレット 土屋 新 岐阜

表紙図案 小島 康男 東京

舞踊衣裳習作 佐原雄次郎 東京

臺所設計試案 鑄金部

電気時計 根箭 忠司 大阪

日向葵灯籠 福井良之助 東京

建築科

集団疎開計劃

伊東ニ建ツ傷痍軍人療養所

師範科 (師範科ニ於テハ卒業製作ヲナサズ)

習作 (油画)

- 同 (〃) 花田 忠吾 青森
- 同 (〃) 河村 貢 山口
- 同 (〃) 上島 一司 高知
- 同 (〃) 武林 敬吉 高知
- 同 (〃) 矢口 洋 栃木
- 同 (〃) 海老沢 敏夫 茨城

文部大臣ノ告辭

本日玆ニ本校卒業證書授與式ヲ舉行セラル、ニ方リ所懐ノ一端ヲ披瀝シテ卒業生諸子ノ首途ヲ祝福スルハ余ノ最モ欣快トスルトコロナリ

惟フニ藝術ハ時代ヲ反映シマタ時ニ之ニ先驅シテ時運ノ嚮フトコロヲ示唆ス、今ヤ皇國未曾有ノ危局ニ直面シ億兆奮激勵精總力ヲ結集シテ聖戰完勝ニ驀進シツ、アリ、決戦下ノ藝術上國民精神ヲ振揚シ雄大剛健ノ風尚ヲ作興スベキ迫力ヲ必要トスルヤ言フ俟タズ、コレ斯道ニ携ハル者ノ正ニ深省スベキトコロニシテ研磨精進至高至上ノ藝術境ニ悟入シテ大イニ皇國文化ヲ昂揚スルト共ニ之ヲ國家總力ノ上ニ活現シテ聖業完遂ニ寄與スルトコロナクンバアラズ、卒業生諸子、本校ニ在リテ拮据龜勉嚴シキ現實ノ試煉ニ堪ヘテ克ク藝術家タルノ識見技倆ト皇國民ノ資質トヲ鍊成シ將ニ之

ヲ活用シテ藝術報國ニ献身セントス、諸子ハ今後直チニ出デテ國防ノ第一線ニ立チ或ハ銃後ニ止リテ繪畫ニ彫刻ニ工藝ニ將タマタ建築ニ各々藝術的天分ヲ揮ヒ或ハ子弟ノ教育ニ従フ等志ストコハ一ナラズト雖モ深刻苛烈ナル戦局ノ現實ハ前線銃後凡テコレ戰場ニシテ本日諸子ト卒業ノ榮譽ヲ頒ツ盟友ニシテ既ニ前線ニ在ル者モ尠カラズ、諸子宜シク思フ此ニ致シ弥々國體ノ本義ヲ確把シ常在戰場ノ信念ニ徹シ修練益々力ムルト共ニ大和明朗一意職域ニ盡瘁シテ子弟ノ教養ニ膺リテハ躬行垂範薰化啓導ニ力ヲ致シ以テ聖慮ノ萬一ニ應ヘ奉ランコトヲ期スベシ、若シ夫レ大節ニ臨ンデ一身ヲ顧ミズ粉首以テ皇國護持ノ大戦ニ生クルハ臣子ノ光榮ニシテ諸子ノ既ニ期セルトコロナルベシ、諸子克ク之ヲ力メヨ

昭和十九年九月二十二日

文部大臣 二宮治重

昭和十九年九月二十二日第五十四回卒業式に於ける

上野〔直昭〕校長式辭

本日第五十四回の卒業式を舉行するに當リ文部大臣閣下を始め、新卒業生の父兄の方々の御來臨を得ましたことは本校の誠に光榮といはずとところでありますし、又卒業生諸君にとつても忘れがたい嬉しい記念であらうと存じます。

平素は尚朝野の貴紳を御招待申上げるのでありますが、時局柄態と御遠慮いたしました。さて本回の卒業生は合計一六人でありまして免状を受けるものは平年と大差ないのであります但其の内八十三名は已に應召して夫々國防の部署について居りますので、

実際に此式に参列し得たものは極めて僅かでありませう。併しながら此の苛烈な戦局に當つて兎も角も卒業式を擧げることが出来るといふ事其の事の内はまだ余裕のある國力を有難く思ふと共に、この余裕を充分に活用して銃後の又戦後の活躍の基礎を固めたいのが吾々の念願とするところであります。

さて御承知の如く、大東亜戦も益々深刻になつて参りまして学徒としても必ずしも十分な余裕を與へられて居らず又與へられた余裕に全力をかけるといふわけにも参りません。或は應召に或は勤勞動員に、学校平素の進行とは著しく異つて、直接戦力増強に參與しなければならぬ場合が発生して参ります。元來なれば今回の卒業生も來年の三月が期限であつたのを半年繰り上げになつた次第であります。従つて今回の卒業生が在學して純粹に学校の課程を履修した日数は必ずしも在來の規則の定むる通には参つて居りません。併し非常の場合に非常の措置の行はれるのは如何なる方面に於いても當然の事でありまして又其の事自身が其の人の生涯の閱歷にとつて重要な意義をもつとすればこれ亦得がたき機會に際會したものととして各個の人間の完成に役立つものであらうと信じます。固より数ヶ年にすぎぬ学校生活が立派な藝術家を諸君に於いて作つたとおもうのは誤りでありまして此數年は漸く藝術生活への初歩を踏みだした位のものでありまして諸君の藝術もこれから先長く人間の教養と共に漸次完成されて行くべき筈であります。従つて時局の影響が諸君の將來にどうあらはれるかは諸君の内に潜む人間の力によるのであつてこれから見れば半年位の時差は必ずしも重大なものではないであります。寧ろ戦争によつ

て與へられた緊張を持ちつゞけて行くところに却つて大きなものが其處に生れるといふことを予想することも出来るのであります。

諸君 最後の学生生活とともに未曾有の大戦を体験した諸君の内には如何に大きなものが生れるかは私が切に期待して居るところであります。此處に新卒業生諸君を送るにあたり一こと式辭を申述べた次第であります。

⑥ 規程改正

昭和十九年六月六日、東京美術学校規程が改正され、從來の規程（昭和八年二月改正）と比べて

一、予科が廃止され、本科、師範科とも修業年限が四年となつたこと。

二、本科、師範科とも入学資格が一年下げられて中学校三年修了程度となつたこと。

三、本科の選択科目は廃止され、從來予科で教えていた一般教養的科目や教職科目とともに適宜各科の学科課程に取り込まれたこと。

四、体育関係科目は、從來は各科とも一年から三年まで毎週二時間の「体操」（教練を含む）が課せられていたが、改正後は一年から四年まで毎週四時間の「教練」と同二時間の「体鍊」が課せられることになり、著しく時間数が増えたこと。

等の大きな変化があつた。この改正は全く決戦態勢に対応するためのものであり、美術教育機関としての独自性は皆無であつたと言え